【研究論文】

かがくいひろし『おしくら・まんじゅう』にみる「生」の表現

鈴木　穂波*

要　旨

かがくいひろし(1955-2009)の絵本を子どもたちと共に読むと、登場者の動きや言葉のリズムに呼吸を合わせるかのようにして楽しむ姿が見られる。そこには読者の体内に自然に届くものがあり、読者の「生」との深い結びつきを見出すことができる。

作中では、人間ではなく、日用品や食品などの「もの」が登場者として描かれる。『おしくら・まんじゅう』（ブロンズ新社、2009）は、登場者の「もの」の特質や音、そこから連想される動きを活かしたかがくいひろしの絵本における「生」の表現が見られる。

キーワード：絵本、かがくいひろし、生

Ⅰ．はじめに

かがくいひろしは、2005 年の『おもちのきもち』（講談社）でのデビューから 2009 年に亡くなるまでの約 4 年間に、15 冊の絵本を出版している。[注1)] その作品を子どもたちと共に読むと、体を揺らして登場者の動きや言葉のリズムに呼吸を合わせるかのようにして楽しんでいる姿が見られる。そこには読者の体内に自然に届くものがあり、読者の「生」との深い結びつきを見出すことができる。

かがくいひろしの作品では、人間ではなく「もの」が主人公である。＜表 1＞に、出版年順に全作品の登場者を挙げた。約 4 分の 1 が生物、残りの約 4 分の 3 は無生物で、無生物のほぼ半分を食品と日用品が占めている。生物と無生物の両方が登場するものがほとんどで、生物のみが登場するのは 1 作品である。無生物のみ登場する作品は、『だるまさんが』（ブロンズ新社、2008）、『だるまさんの』（ブロンズ新社、2008）、『だるまさんと』（ブロンズ新社、2009）から成る「だるまさん」シリーズの 3 作品を含み、15 作品中約 3 分の 2 にあたる 6 作品あり、1 作以外は全てブロンズ新社から刊行されている。そのうちの一つが、今回とりあげる『おしくら・まんじゅう』（ブロンズ新社、2009）である。この作品では最後に「ゆうれい」が登場するが、その他の登場者は全て食品である。食品が出てくる作品にはいずれも生物が登場しているが、この作品においては食品が中心であるということも、他の作品にはない独特の世界観を生み出していると考えられる。

また、かがくいひろしの作品は大きく、赤ちゃん向けのファーストブックと創作物語絵本とに分けられる。前者は、二拍子、あるいは三拍子のページのめくりのリズムをもつ。背景や場面設定などの要素がそぎ落とされているため、「もの」の変化や動きがクローズアップされ、その生命感が際立つ。この『おしくら・まんじゅう』や「だるまさん」シリーズ、『おふとんかけたら』（ブロンズ新社、2009）がファーストブックにあたる。「ねむり」をテーマにした『おふとんかけたら』は、『おしくら・まんじゅう』と「静」と「動」という面で対となる作品と位置づけられる。

本稿では、『おしくら・まんじゅう』をとりあげ、1 冊の構成を丁寧に読み解くことで、読者の「生」と結びつく表現を明らかにしていく。さらに、身体性、「もの」と「動き」、「読み合う」ということ、という三つの視点から、かがくいひろしの絵本における「生」の表現について考えていきたい。

*岡崎女子短期大学

表１

作品名	生物		無生物						その他
			植物	野菜		果物	食品	日用品・玩具	
おもちのきもち	いぬ・ねこ	にわとり・みみず					かがみもち		農夫
もくもくやかん	かえる	こい						やかん	かっぱ
								ポット	農夫
								じょうろ	
								きゅうす	
おむすびさんちのたうえのひ	たこ	いか					おむすび		
							しゃけ・たらこ		
							おかか・うめぼし・こんぶ		
							おいなり・ほそまき・ふとまき		
ふしぎなでまえ				じゃがいも				どんぶり	
				さつまいも				さら	
だるまさんが								だるま	
なつのおとずれ	かたつむり	かぶとむし	ひまわり	とうもろこし		すいか	そふとくりーむ	せんぷうき	おひさま
	せみ					めろん	かきごおり	かとりせんこう	
							ながしそうめん	きんぎょばち	
								うきわ	
はっきよい畑場所	かえる	みみず		じゃがいも	はくさい				
				かぼちゃ	ながねぎ				
				ごぼう	さつまいも				
				ぴーまん	きゃべつ				
				たまねぎ	にんじん				
				きゅうり	なすび				
				すいか	だいこん				
だるまさんの								だるま	
だるまさんと						いちご		だるま	
						ばなな			
						めろん			
まくらのせんにん さんぽみちのまき			き	だいこん				まくら	たまご（きょうりゅう）
								しきぶとん	
								かけぶとん	
おしくら・まんじゅう							まんじゅう		ゆうれい
							こんにゃく		
							なっとう		
みみかきめいじん	ぞう	うさぎ						ひょうたん	サンタクロース（とうめいにんげん）
がまんのケーキ	かめ	こい							
	かえる								
おふとんかけたら	たこ	あり	まめ				ソフトクリーム	トイレットペーパー	
	きりん							ふとん	
								まくら	
まくらのせんにん そこのあなたのまき	ぞう	きりん						まくら	
	うさぎ	もぐら						しきぶとん	
	あり							かけぶとん	

Ⅱ．全体の構成

（１）体裁

ブロンズ新社刊行のかがくいの他の作品が正方形なのに対し、横幅が広い長方形である。また、表紙は発色のよいオレンジ色だが中の紙の色は全てベージュであること、角が丸い「くるみ製本」であること、絵の輪郭線が茶色中心で柔らかな統一感があるところは、『おふとんかけたら』と共通している。彩色した上から指でこすっており、輪郭線ははっきりとしているものの柔らかさや質感があり、陰影による立体感ももたらされている。

表紙の発色のよいオレンジ色や長方形のワイドな画面によって、エネルギーや躍動感が感じられるが、一冊の絵本の中の温度感には統一感がある。

（２）登場者の描き方と構成

次に、登場者の描き方に注目しながら、全体の構成を見ていきたい。

①表紙と第１ページ

表紙（図 1）では、紅白まんじゅうが背中をつけ合い、笑顔で「おしくらまんじゅう」をしている姿が描かれている。だが、体を押し合っているというよりは、力の均衡が穏やかに保たれているといった印象を受ける。ここでは、かがくいひろしの他の作品と同じように登場者の足下に地面が描かれ、「そこにいる」ということが感じ取れるが、足を踏ん張っているといった印象はここではもたらされない。紅白まんじゅうは大きさもほぼ同じで、表情に若干の違いがあるものの、双子のようである。口角があがり、頬がほんのりと赤く、手を顔の前にそろえていて、愛くるしさがある。

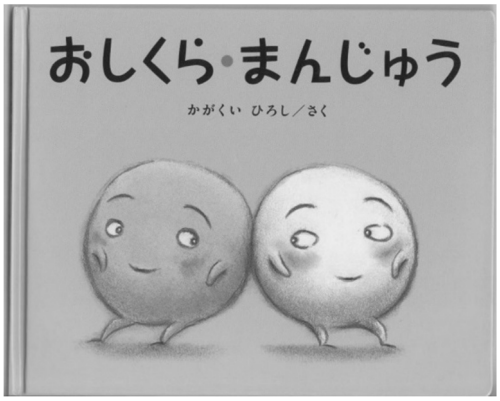

図１　『おしくら・まんじゅう』表紙

しかし、表紙を開いた第１ページ（図 2）では一転して、うってかわった表情の紅白まんじゅうの横顔が描かれている。どちらも口を真一文字に結び、両手を降ろし、先ほどまでのかわいらしさは見られない。

表紙で登場者の姿が魅力的に描かれている一方、その直後の冒頭部分で表紙とは印象が異なる絵が描かれているという形は、その他のかがくいのファーストブックにも見られる。例えば、『だるまさんが』では表紙に「だるまさん」がアップで描かれた後、次のページでは座って目を瞑る「だるまさん」の姿が描かれている。ここでは文字がなく絵だけであること、登場者が動き出す前の「静」の状態を表していること、表紙とは絵のタッチや印象が異なること、また、これ以降の場面に比べて登場者が若干小さく描かれていることなどが共通している。

表紙は「かわいらしい」、「楽しそう」といった印象で読者の気持ちを掴み、この第１ページは表紙との対比によって絵本の内なる世界へと読者を引き込むような役割を果たしているのではないだろうか。

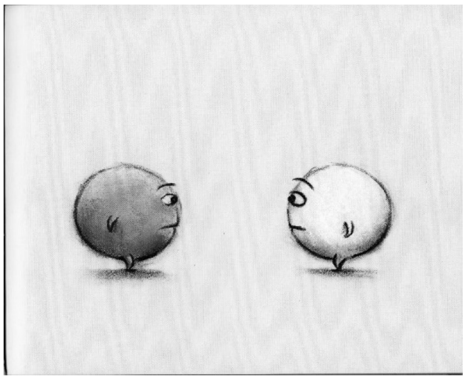

図２　『おしくら・まんじゅう』第１ページ

②第１見開きから第12見開き

第２ページからは、3 見開きで 1 つの組み合わせというパターンが 3 度繰り返される。4 度目も同じように繰り返されるが、最後の見開きと最終ページで他とは異なる展開になる。

まず、第１見開きから第3見開きまでを見てみよう。第１見開き（図 3）では、向かい合った紅白まんじゅうが「おしくらまんじゅう」と歌っている。左ページの左上には、ことばで触れられる前に、次の登場者である「まんじゅう」がすでに描かれている。第２見開き（図 4）では、紅白まんじゅうの間で「まんじゅう」が押されている姿がある。そして、最後の第３見開き（図 5）では押された結果泣いてしまった「まんじゅう」の姿が描かれる。

最初、紅白まんじゅうが生き生きとしているのに対し、その他の登場者はどこか遠慮がちにおずおずと登場する。ところがその後、紅白まんじゅうと登場者の表情や立場が 3 見開き目で逆転するというのが、共通した一つのパターンとなっている。

では、1 見開き目から 3 見開き目までの流れや内容について具体的にみていこう。1 見開き目では、左ページ真ん中に「そーれ」とあり、右ページで「おしくらまんじゅう」と歌う前の掛け声となっている。左ページの左上に順に登場する「まんじゅう」、「こんにゃく」、「なっとう」、「ゆうれい」は、いずれも右の様子を眺めながら「それは自分のこと？」と尋ねるように指を顔にあて、不安げに佇んでいる。「そーれ」という威勢良く誘いかけるような掛け声とこの様子との不一致から、さらにその不安感は強調されるといえる。右ページでは、左側の赤いまんじゅうの上には「♪おしくら　まん」、「おしくら　こん」「おしくら　なっ」「おしくら　ゆー」が、右側の白いまんじゅうの上には「じゅう」「にゃく」「とう」「れい」の文字があり、それぞれことばを発した時の口の形をしている。さらに、例えば「まん」は少し上を向いて声を斜め上に響かせるような、「じゅう」は水平にまっすぐ声を届けようとするような姿勢をとっている。単にその音を発する口の形というだけでなく、体全体でその音を発しているようである。

2 見開き目では、「おされて」の後にそれぞれ「ぎゅー」「ふん」「ぐにゅ」「ヒュー」という音が続く。ここでの紅白まんじゅうは表紙とは全く違う印象で、力いっぱい足をふんばって体を押し合っている。基本的には 4 回とも同じ姿勢だが、目玉の位置が違ったり、例えば最後の「ゆうれい」の場面では形が縦長になったりするなど、間に入るものに合わせて押し合っている姿が細かに描き分けられている。一方、間に入っているものは一様に不安げで、一方的に押されているような印象をもたらすため、次の展開がより強烈に感じられる。

3 見開き目では、2 見開き目最後の「おされて～～～」から繋がるように、その結果が描かれる。最初の「まんじゅう」は泣いてしまうが、その後は「はねる」、「くっつく」という変化によって、形勢が逆転する。まず、「まんじゅう」は、「おしくらまんじゅう　おされてなくな」という元の遊び歌を踏まえて、「泣く」。押されたことで中のあんが出てしまうといったまんじゅうという素材の特質を活かしたような変化ではなく、大粒の涙が目からこぼれている。一方、次の「こんにゃく」や「なっとう」は、その「もの」としての特質を活かしながら、大きくその姿が変貌する。「こんにゃく」は紅白まんじゅうをはじきとばし、「なっとう」はねばりで紅白まんじゅうを捕らえる。「こんにゃく」は体が膨れ、「なっとう」は目や口もねばり、どこか得体の知れないようなものにまで変化してしまうのである。

この 2 つに続いて登場するのが「ゆうれい」である。「ゆうれい」は他の 3 つとは異なり、最初は口が描かれていない。そのため、最後に登場したときの口や目の大きさが際立ってくる。また、ここでは「ゆうれい」の手が長く伸びる。体の白さもあり、まるで餅がのびているようでもある。食品が続く中で、「ゆうれい」だけが異色ではあるが、他の登場者と全く違うというよりもむしろ、同じ種類という印象がもたらされる。

③13 見開きと最終ページ

13 見開き（図 3）では、おいしそうに何かを食べているゆうれいの姿がある。ここでは「ゆうれい」の体が丸くふくらんでおり、またここまで画面に必ず登場していた紅白まんじゅうの姿が見あたらないことから、「ゆうれい」が紅白まんじゅうを食べてしまったということが暗に示される。ここでの「ゆうれい」の姿は幸せそうで愛らしく、紅白まんじゅうを食べてしまった悪者という位置づけがなされているようには見えない。そして何よりも、ここまでこの絵本の中で意識することを促されてこなかった、紅白まんじゅうが食べ物で、加えて「おいしい」ものだということにあらためて気づかされる。

ページをめくると再び紅白まんじゅうが登場するが、ここでは「ゆうれい」の姿である。「またね～」ということばとともに去っていく姿からは、全く後悔や無念さは感じられない。むしろ、ここまで感情がはっきりと細やかに描かれてきたまんじゅうにしては、単純にも感じられるほどの笑顔である。

裏表紙には、上下に重なった紅白まんじゅうの姿がある。食べられてしまったら「もの」としての存在はなくなるということをはっきりと示しながらも、どこかに残り続けているような印象を残す終わり方になっている。

（３）音の表現

次に、音の表現に着目する。まず、「まんじゅう」「こんにゃく」「なっとう」「ゆうれい」という 4 つの登場者の音についてみてみよう。「まんじゅう」

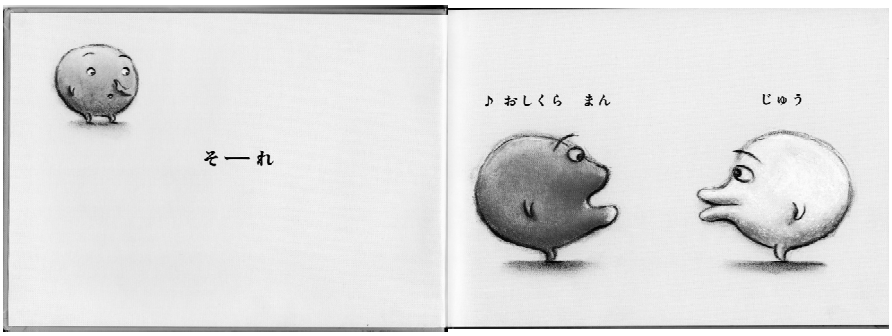

図３『おしくら・まんじゅう』第１見開き

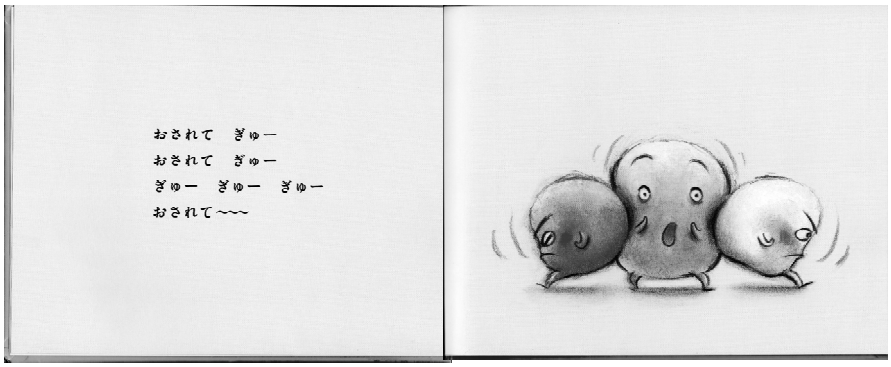

図４『おしくら・まんじゅう』第２見開き

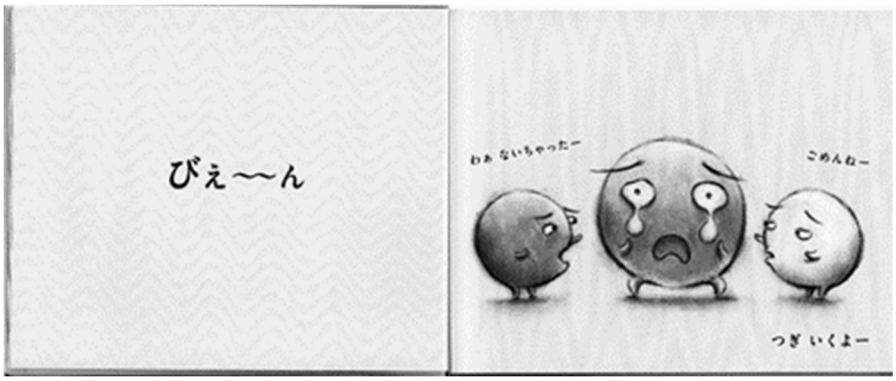

図５『おしくら・まんじゅう』第３見開き

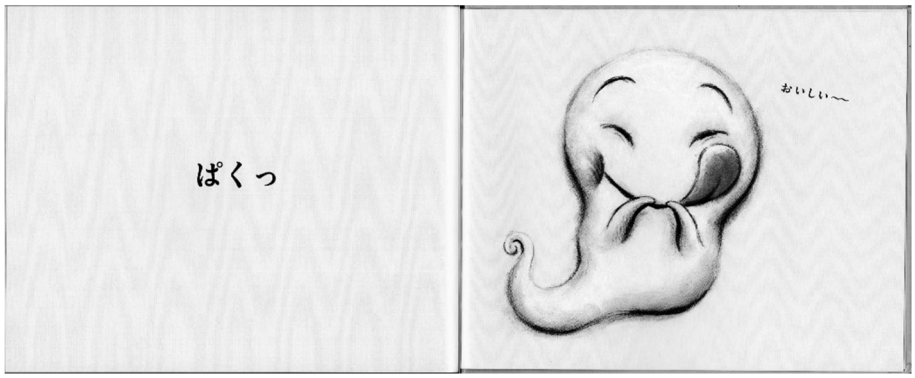

図６　『おしくら・まんじゅう』第 13 見開き

と「こんにゃく」は、「まん」「こん」とどちらも二つ目に「ん」が入り、その後それぞれ「じゅ」「にゃ」ととという音が続く。次の「なっとう」は「なっ」という促音の後に「とう」が続き、「まんじゅう」の「ま」と口を開ける音と「じゅう」の口を突き出す音との組み合わせと同じである。

そして、紅白まんじゅうの体でも音を表現している。二つが凸凹のように、口を開けた形と口を突き出した形の組み合わせになっており、それが左、右と交互に入れ替わる。かけ合いのリズムが音だけでなく、身体表現として視覚化されている。

その次の見開きでは、押された状態が、様々なオノマトペで表現されている。「ぎゅー」は、強く押しつぶされて立てるにぶい音を表すとともに、やりこめられた様子も示す。こんにゃくの「ふん」は、鼻から出す息の音を表すとともに、気合いを入れている様子が伝わる。次の納豆の「ぐにゅ」は、弾力を保ちながらもやわらかいさまが表されているが、言うことが明瞭でなくよく分からない状態とも捉えられる。このように、体を押し合う中で音として聞こえるものと、感覚や様子を表すものの両方を持ち合わせているといえる。

最後の見開きの「びえーん」「ねっばー」「ぷるるーん」「びろーん」には、「び」、「ば」などの濁音、「ぷ」という半濁音といった両唇を合わせて破裂させる音、そして、「えーん」、「ばー」などの伸ばす音が入っている。いずれも弾けた音で強調し、伸ばす音でその余韻を感じさせる形になっている。

一番最後の「ぱくっ」は、半濁音と促音の組み合わせでこの流れに区切りをもたらす。そして、続く「またね～」でも長音が使われるが、「～」という標記も、穏やかな終わり方を印象づける。

Ⅲ.「生」の表現

（１）身体性

かがくいひろしの『もくもくやかん』（講談社、2007）や『だるまさんが』では、息を吸って吐く、体を揺らすなどの登場者の身体の動きが描かれている。そして、それが絵本に向き合う読者にはたらきかけ、読者が共振する様子が見られる。例えば、『もくもくやかん』には「やかん」をはじめ、「じょうろ」や「ポット」など複数の登場者が出てくるが、横並びに一列に並び、読者と向き合う形で一斉に同じ動きをする。この『おしくら・まんじゅう』では、表紙ですでに紅白まんじゅうがおしくらまんじゅうをしているように、登場者同士の関わり合いもある。さらに、最初は優勢に押していた紅白まんじゅうの形勢が逆転されていくが、人と関わり合う中での変化というものが象徴的に表されているといえるだろう。

ことばはその動きがより伝わりやすい場所に標記されているなど、絵とことばに一体感をもたらす工夫がみられる。「おしくらまんじゅう」ということばには「♪」マークが付けられていて、紅白まんじゅうたちが歌っているかのようである。先述したように、体で音を表現しているようにも描かれている。

さらに、読者が登場者と正面から向き合うような構図である。そのため、絵本から発せられるエネルギーが読者にストレートに伝わっていくといえるだろう。それに対して、角を丸くしたくるみ製本やベージュ色の紙は、そのエネルギーをどこか柔らかく温かみのあるものにもしている。

絵本の「身体性」は、読者との関わりの中でその意義が発せられるものであり、この作品はそれを前提として作られているといえるのではないだろうか。

（２）「もの」と「動き」

次に、「もの」がどのような「動き」で描かれているかをみていきたい。『もくもくやかん』では「やかん」が息を吸って吐くという現実にはない動きが描かれている。『だるまさんが』では、だるまが揺れるという「おきあがりこぼうし」に着想を得た動きから、伸びたりしぼんだりと自由自在の動きへと変化していく。『おもちのきもち』（講談社、2005）では、もちがかたくなるという実際の食べ物の変化を取り込んだ動きが描かれているなど、作品によってさまざまなパターンがみられる。

この『おしくら・まんじゅう』では、その言葉から、「まんじゅう」が「おしくら」をするという発想を得ている。「おしくらまんじゅう」という遊びに触れる中ではこのような身体的なイメージは想像しないが、まんじゅうというやわらかく弾力のあるものが「押し合う」ことや、一対の紅白まんじゅうとして描かれることも腑に落ちる。さらに、「こんにゃく」や「なっとう」といったその触感が特徴的な「もの」が、間に入って押し合うことで、その関わりによる変化が引き出されている。このように、「もの」の特徴を活かすことで、自然にユーモアのある動きが生まれている。

最後に「ゆうれい」に紅白まんじゅうが食べられ、「ゆうれい」になるというのは、衝撃的な結末にも

思える。だが、おいしそうに誰かに食べられ、消えてなくなってしまうというのは、まんじゅうというものの本来の姿ともいえる。

人間のような姿と、食べ物の本来の姿の混じり合いから、ユーモアや読者が予想しないような結末が導き出されるところも、かがくい作品の特徴といえるだろう。

（3）「読み合う」ということ

この作品を子どもたちと読むと、「おしくら・まんじゅう」ということばにのって体を動かす子どももいれば、次に登場するものに注目して「まんじゅう」の変化に夢中になっている子どももいる。どちらにしても、冒頭の紅白まんじゅうが向き合っている場面から、すっとこの絵本に入り込んでいく姿が印象的である。

また、大人と子どもが読み合うと、紅白まんじゅうをゆうれいが食べるという展開には、大人と子どもとではその反応に大きな違いが見られることがある。衝撃を受けたような様子が見られるのは、小学校低学年以上の子どもや大人である。一方、幼い子どもは、「ゆうれい、おまんじゅう食べちゃったね」、「おまんじゅう、おいしそう」と「ゆうれい」の側に立った発言をすることからも、その展開をごく自然に受け止めていることが分かる。

さらに、この作品では、「おしくらまんじゅう」という身体の触れ合う遊びがもとになっている。絵本を読むという行為自体は、体を触れ合わせることを前提にしているものではない。だが、子どもを膝にのせて読んだり、隣に座って読んだりしていると、自然と絵本の展開に合わせて、「おしくらまんじゅう」のように体を押し合ったり揺らしたりといったことにもつながっていく。また、例えば複数の子どもたちに向けて大人が読み、読み手と子どもの距離が近くない場合、子どもたち同士が「おしくらまんじゅう」のように体を押し合いながら聞いている姿もみられる。誰かと読み合うことによって、絵本のリズムに共振していくことの喜びがさらに深まるといえるだろう。

Ⅳ．おわりに

かがくいひろしは、「絵本を通じて、関係性が生まれるんです。これは普通の本はできないこと。絵本は人と人をつなぐ、特別なものなんです。」[注2)]と述べている。かがくいひろしの絵本を通じての関係性の根底には、「感覚を共有する」ということがあり、それを支える様々な表現や工夫がみられる。だからこそ、幼い子ども、そして大人も、その絵本世界の共同体としてたのしむことができるのではないだろうか。

その「感覚」とは、人を「生」に突き動かしていく混沌としたもの、言語以前の気配や躍動といったものではないかと考える。それが、作者の読者と共にたのしんで感じあいたいという思いによって、ユーモアをもって現れているといえよう。そのため、読者は、自然に受け入れることができているように思われる。

この『おしくら・まんじゅう』で登場する「まんじゅう」や「こんにゃく」「なっとう」「ゆうれい」という「もの」自体も、読者の心の奥底からの共感を引き出すものをもっていると推測される。それは、他のかがくいひろしの作品にも共通し、かがくいひろしの作品全体の特徴や読者との関係性を考えるうえで重要な点である。今後さらに考察を重ねていきたい。

注

1）

『おもちのきもち』講談社　2005 年 12 月
『もくもくやかん』講談社　2007 年 5 月
『おむすびさんちのたうえのひ』PHP 研究所　2007 年 5 月
『ふしぎなでまえ』講談社　2008 年 1 月
『だるまさんが』ブロンズ新社　2008 年 1 月
『なつのおとずれ』ＰＨＰ研究所　2008 年 6 月
『はっきよい畑場所』講談社　2008 年 8 月
『だるまさんの』ブロンズ新社　2008 年 8 月
『だるまさんと』ブロンズ新社　2009 年 1 月
『まくらのせんにん　さんぽみちの巻』佼成出版社　2009 年 1 月
『おしくら・まんじゅう』ブロンズ新社　2009 年 5 月
『みみかきめいじん』講談社　2009 年 9 月
『がまんのケーキ』教育画劇　2009 年 9 月
『おふとんかけたら』ブロンズ新社　2009 年 10 月
『まくらのせんにん　そこのあなたの巻』佼成出版社　2010 年 1 月

2）「mi:te〔ミーテ〕／絵本作家インタビュー　絵本作家　かがくいひろしさん（前編）」http://mi-te.kumon.ne.jp/contents/article/12-37/ 2016 年 1 月 27 日参照

参考文献

・「かがくいひろし ずうっとぬくぬく」『絵本通信』No.72 2009 年秋季号、射水市絵本文化振興財団、2009 年10 月
・「かがくいひろしの絵本」『月刊ＭＯＥ』3 月号、白泉社、2010 年 2 月
・「個人特集 かがくいひろし」『月刊イラストレーション』No.182、玄光社、2010 年 3 月
・「＜追悼　かがくいひろし＞時間いっぱい、ありがとう」『この絵本が好き！2010 年版』平凡社、2010 年 3 月
・「追悼 かがくいひろしさん」『えほん大好きマガジン この本読んで！』2010 年春号　10 巻 1 号（34）、出版文化産業振興財団、2010 年 2 月
・古市久子「こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本」『東邦学誌』第 43 巻第 2 号、2014 年 12 月
・水島尚喜「かがくいひろしが残した絵本　子どもの在処をめぐって」『美育文化』11 月号 第 63 巻第 6 号、美育文化協会、2013 年 11 月
・『Casa BRUTUS 特別編集　読み継ぐべき絵本の名作 200』マガジンハウス、2015 年 1 月
・大塚民族学会『日本民俗事典』弘文堂、1979 年
・大島建彦『日本を知る事典』社会思想社、1979 年
・小野正弘『日本語オノマトペ事典』小学館、2007 年
・半澤敏郎『童遊文化史 1 巻』東京書籍、1980 年
・福田アジオ『日本民俗大事典（上）ア～ソ』吉川弘文館、1999 年
・「絵本ナビ／「だるまさん」シリーズが大人気！かがくいひろしさんにインタビューしました。」http://www.ehonnavi.net/specialcontents/contents.asp?id=97　2016 年 1 月 27 日参照
・「講談社絵本通信／わたしはこうして獲りました！　絵本新人賞インタビュー　かがくいひろしさんの場合・前編」http://ehon.kodansha.co.jp/archives/interview03.html　2016 年 1 月 27 日参照
・「講談社絵本通信／わたしはこうして獲りました！　絵本新人賞インタビュー　かがくいひろしさんの場合・後編」http://ehon.kodansha.co.jp/archives/interview04.html　2016 年 1 月 27 日参照
・「mi:te〔ミーテ〕／絵本作家インタビュー　絵本作家　かがくいひろしさん（前編）」http://mi-te.kumon.ne.jp/contents/article/12-37/ 2016 年 1 月 27 日参照
・「mi:te〔ミーテ〕／絵本作家インタビュー　絵本作家　かがくいひろしさん（後編）」http://mi-te.kumon.ne.jp/contents/article/12-38/ 2016 年 1 月 27 日参照

※図版に用いた画像については、著作権者より掲載許可を得ている。